



大学の学び

教育現場を理解する研究者を育成し、
日本や世界の教育改善に貢献する
東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教育内容開発コース
北村友人研究室

この学びに関する
他の SDGsの目標



途上国支援、平和教育を
通じて世界に貢献したい

東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教育内容開発コース
博士課程1年の須藤玲さんが、途上国の教育に関心を持ったのは、高校

私たちが紹介します



教育学研究科 学校教育高度化専攻 教育内容開発コース 博士課程1年
須藤 玲
すどう・れい

兵庫県・私立六甲学院中学校・高校卒業。上智大学総合人間科学部教育学科卒業。同大学院総合人間科学部教育学専攻修士課程修了。



教育学研究科 学校教育高度化専攻 教育内容開発コース 修士課程1年
萩原 さつき
はぎわら・さつき

神奈川県・私立公文国際学園中等部・高等部卒業。国際基督教大学教養学部卒業。

2年生の時だ。出身高校は奉仕活動の一環で、インドのハンセン病施設で暮らす子どもたちへの募金を毎月行っており、須藤さんはその子どもたちに直接会いに、同国を訪れた。「高校教師になりたいと考えていましたが、インドの貧困の状況を目のあたりにし、自分にできることはないかと考えるようになりました」そんな折、当時、上智大学総合人間科学部に在籍していた北村友人准教授の講演会に参加し、教育分野で途上国に貢献できることを知り、上智大学総合人間科学部教育学科に入学。その後、同大学院修士課程に進み、教育社会学を学んだ。

「経済や開発の面から途上国支援にかかわる人が多い中、私は教育の面から支援をしたいと考えました。そこで、より実践を重視した教育学を行う北村准教授の下で学ぼうと考え、東京大学大学院の博士課程に移りました」同コース修士課程1年の萩原さつきさんは、高校時代、ポルトガルに1年間留学した経験から、平和教育に興味を持った。「世界中から集まった留学生と一緒に学び、多様な価値観に触れることができました。帰国後、過激派組織イスラム国がポルトガルに勢力を拡大するという報道にショックを受け、世界の平和を目指すにはどうしたらよいか考え始めました」萩原さんは、平和研究を専攻できる国際基督教大学教養学部に入学者。中学校の英語教育で平和教育を実践する卒業研究に取り組んだ。

「平和教育をより広い視野で学びたいと考えていたところ、平和教育を包含する『持続可能な開発のための教育（以下、ESD）』（目標4、16）を研究している北村研究室のことも知り、東京大学大学院に入学しました」

北村研究室のある東京大学では、学部1・2年次は、全員が教養学部
に所属し、3年次から各学部に進む。
教育学部は、3専修5コースに分か
れており、専門科目を履修し、4年
次から研究室に所属する。北村准教
授が学部で担当するのは、教育社会
科学専修の教育実践・政策学コース
で、卒業論文の指導も行っている。
同大学院教育学研究科には、2専
攻10コースがあり、北村研究室は、

実際の授業を分析し、
よりよい教育を追究する



写真1 北村研究室には、留学生も在籍。萩原さんは、研究の手始めに、フィリピン人の留学生とともに論文検索システムを用いて国内外のESDに関する論文を調べ、キーワードを分析している。

学校教育高度化専攻教育内容開発コースに設置されている。教育現場の実践から学ぶことが、学校教育の質向上を考える際に重要であると捉え、「授業の事例研究」と「授業の実地研究」の2つの授業を同コースの核としている。

『授業の事例研究』では、生徒のノート、教師と生徒のやり取りなど、自分なりの視点で授業を分析し、皆で議論します。今年度は、オンラインで行いましたが、議論は尽きることなく、私も授業の見方が深まりました」（須藤さん）

「授業の実地研究」では、学生が実際に10時間程度、授業を観察し、教室の中の現実を理解する。

北村研究室は、教育内容開発コースの人文社会教育分野を担い、「目

標4 質の高い教育をみんなに」を中心とした研究を行う。

ゼミ生がテーマとするのは、各国の教育の思想・政策・制度・実践だ。ゼミ生同士の対話を重視し、院生と学部生と一緒に議論を深めている（写真1）。

自らの課題意識を深め、国内外に質の高い教育を

萩原さんは、目標4のターゲット7に掲げられているESDの普及について研究している。学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」の育成が目標に掲げられているが、日本の中等教育では、ESDがまだ浸透していないのが現状だ。

「ESDは、『総合的な学習の時間』など、教科外で学習するという意識が強いようです。ただ、ESDとは、他者を思いやる気持ちを育てる教育なども含まれており、教科の中でも実践できます。全国の学校がESDを実践できるよう、学校を対象とした調査を行い、課題を明らかにしたいと思っています」（萩原さん）

須藤さんは、学部時代から東ティモール



写真2 大学2年生の時から計4回、調査のため東ティモールを訪問。現在は渡航できないため、他国での多言語教育の実践に関する先行文献の研究を行っている。

2)。同国は、アジアでも最貧困の国の1つで、教育環境の整備が十分ではない。歴史的な背景もあり、多くの言語が使用されているため、学校で教師がどの言語を使って教えるべきかなどの課題が存在している。

「母語を基礎とした多言語教育がいくつかの地域で行われています。その実践例を取り上げ、子ども・保護者・地域社会の様子を、国内の複数の地域間で比較しようと考えています。回国全土で一定の質が担保された教育を実施する（目標5、10、16）のが自分の使命だと考え、研究に取り組んでいます」（須藤さん）

卒業後は、2人とも研究者の道を念頭に入れつつ、須藤さんは国際連合など、国際機関への就職を、萩原さんは教材製作を行う企業への就職を検討している。

学びとSDGs

学術的知見と教育現場の実務を学び、2つをつなぐ人材に



東京大学大学院
教育学研究科准教授
北村友人
きたむら・ゆうと

私の研究室の主な研究テーマは、教育における公共性の問題です。学術的な知見と教育現場における実務の双方を学び、その2つをつなぐ人材の育成を目指しています。

須藤さんと萩原さんは、研究テーマを実体験から導きましたが、研究を深めるためには、自分の関心が、どのように社会の問題に結びついているのかを考えることが大切です。

そして、問題の解決策を考えるためには、実践知から学ぶことが有益です。研究室では、カンボジアなどの途上国に赴き、調査・分析を行うフィールドワークを上智大学と合同で行っています。また、研究者や卒業生も参加する研究会を開催しています。多様な人と学び合う中で、自らの学びを掘り下げてほしいと思っています。

高校生には、探究的な学びに積極的に取り組んでほしいです。複数の新聞を読み比べたり、海外の通信社のウェブサイトを閲覧したりして、情報収集を行うことで、探究の土台となる「知の基礎体力」を身につけることは、大学の学びの基礎にもなります。